

「天津重工先進技術実証機零式乙型器」

蜜瀬かえで 著

変形機構って浪漫でしょ？

なぜそこまで入れ込むのか？ 父に訊ねられたとき、確かに私はそう応えた。文脈とかよく覚えてないけれど。そのときのやりとりだけは覚えてる。

「こんな変態に育てた覚えはないんだがなあ」

今思えば放蕩娘へ当てた言葉だったのだろう。そのときは気づかず。たぶん何かの作業中だったはず。

「育っちゃったものは仕方ないね」

恐縮です。そう返した。父は天を仰いでいた。

それを初めて見たのはいくつの頃だったろう。家が家なものだから、物心ついた時には側にあるのが普通だったし。開発部にも結構ちょくちょく出入りしていた記憶があるから、自分からの興味もあったはず。ただ決定的だったのはあれだ。幼な心をがっしりつかんだのは。

ユグドラシル社製 AC-13 グングニル。

そのプロトタイプ。あの型は今ではブリューナクって名

前を変えてケルティックデールが高級商品化してるけど。アレの登場が私にとってまさしく彗星だった。

いやだって、変形するのよ？ ……普通とか言わないで。あの時代にはアレが普通じゃなかった。それまでも合体分離のおまけみたいな感じの変形はあったけれど。あそこまでがつつりじゃない。一応なりとも開発部にも出入りしている会社の娘だ。うちが何を作ってるかくらいの知識はそこいらの子よりもずっと勉強していた。

だから、そのときめちやくちや駄々をこねた。分かりやすく言えば玩具売場。必殺のアレほしい！ アレ買って！をたぶん人生で一番発揮した自信はある。無論、親の回答はこう。

「家にたくさんあるでしょ」

それに対しての反論は簡単だった。

「御蓋は変形しないでしょ」

父の苦々しそうな顔を思い出す。うん。年端も行かない娘にそこまでの知識を与えてしまっていた親が完全に悪い。こっちはもうわかってるのよ。ユグ社は基盤開発がメインで、メーカー間のやりとりも融通が利く。そこがこれまでなかった変形機構を搭載した機体を私にでも見るとこまで出してきた。ということはつまり、うちにも最低

一機は回ってくるし、開発部で一回はバラすよね？ それを私にも遊ばせてほしい。具体的にはそこまで言った。こまっしやくれた娘だなあ。そのときも父は天を仰いでいた気がする。

天津だけに。

そんな大昔の事をぼんやりと思い出しながら目をこする。中途半端に寝てたか、寝てないか。大きなあくびひとつ。令嬢だろうが、眠いときはあくびをする。人間だもの。

わけわかんないねー？ 思いつつ、目線の先にはつい先ほど完成した機体が鎮座マシマシしている。

天津重工先進技術実証機零式甲型器。長いわ。略して、甲型器ちゃん。

なんでもライトユーザ層に向けに扱いやすい機体を売り出したいとかで、第二世代機をオミットしてオミットしてオミットしまくった。まあ、ベースにしたのは私が設計したフルンティングである子は第3世代機なのだけど。細

かいことは置いておき、いつもの「お嬢、カムヒア」で呼び出され、おっしや。やるか。の数日で形にした。

コアのOS下げて、必要最低限のラインをキープしつつ、あとはとにかくオミットしたい開発部と私の殴り合いだ。うわくそ、うぎやあ、おい待てそこ待て、ああつ！ もう！ そこそうするってんなら、このラインで攻めた方が軽いから、そこは残せ。残すの！ 残すんだってば！ ああもう！ じゃあそこはこつち！

カンカンガクガクって言ったら聞こえはいいけれど。要は開発部が削り、私が絶叫しながら削られたところを最適化していく。いや、もう本当マジで二度と来てやるものかと思いつながらだったわ。完成してよかったわね。……この子に言ってるのよ。文句ある？

気づけばガシガシ気付けのミントかじっていた。眠るつもりだったのに。普通に目が覚めてくる。まず思ったのはあー……っ、変形してえええっ！

完全に反動だわ、これ。

この子に罪はないけれど。私は、もっと、ガシガシ、動くのが、好き！

ぼんやり脳内図面広げたら、すぐに悪魔が天啓持つてやってくる。

「フヒ」

変な笑いが出た。

笑いながら背中を預けていた壁から身を起こし、立ち上がる。甲型器ちゃんは、こっち。場所交代ね。

モニタを操作し、パブリッシュされてる図面を広げた。第四世代機エインヘリヤル。それと、白銀の甲冑を思わせるフルアーマーバトルクロス。2枚を重ね合わせながら必要なのは、失敗恐れずノインヴェルト特殊弾、3つくらいかなあ。

そうやって思案していると、起きてた職員も船漕ぎしてたのも、寝てたのも、なんだなんだとやってくる。

いいわよ。いいわ。貴方たちだっていい加減フラストレーション溜まってんじゃない？ 金儲けとかあんまし関係なく、一緒に楽しいことに興じましょ。

頭ん中、変なもんどバドバ出てる気してるけど。こうなっただけが楽しい時間。

ローワーバウンド目指したら、今度は目指すよね、アッパバウンド。第二世代機の最頂点。

「……変形機構、マシマシで行くわよ？」

天津重工神器開発部に、団結の声が再び上がった。

深夜テンションとも言おう。

「お嬢っ。特殊弾、数そろいました！」

オーケーっ！ こっちも仮組終わる！

「こっちのマジキヤノン、2つ折りを速度落とさず3つ折りにできます！」

マジかつ！ じゃあそれ面積活かして、そのまま防御に使えるサイドアーマーにしてちょうだいっ！

「この出力設定だと高出力砲の強度が」

んなもん、今回は全部度外視！ マジ保有量は天野天葉、スキラー数値立原紗癒。それなら内部までガードコーティング可能！

「こっちの」

フィンは結構重要だし、こっちきて！ 一緒に合わせる！

「……流体とか、ずっと弾道計算くらいにしか使っていないわ」

私も同じくらいだからそれでよし！ ミサイル作る気

でぶっ飛ばして！

「……でもこれ、完成したあとの試験運用」

そんなの、出るのよろしくよく。この子を試すのにちようどいいくらいの敵の群！ この世界結構アバウトだからね！

『基本的に、アバウトですね！』

全員が団結してサムズアップしました。

「出るとは言ったけど、本当に出るものねえ」

感慨深く見下ろす先には広大な、太・平・洋！ の上に厚くかかった真つ白な雲の海。遥か地上を離れてお空の上の高く高く。向こうの索敵範囲の外かつ、反射式ソナー系のセンサはやぶ蛇なのでこうして雲の切れ間を見つけて望遠鏡で覗いているけれど、この格好だと胸部装甲が邪魔で結構難しい。要修正事項に加えておく。

「もうちょい左。行き過ぎ。右、そう、あともう少し右」
アバウトとはいえ、このタイミング。しかも航空戦力の

みの矢尻型編隊飛行とか。そこに良くも悪くも何かしらの作威を感じずにはいられないけれど。まあ理由なんてものはいま考えずとも後からいくらでもくつつくものだし。

よし。まずは相手に気取られず真上をとることに成功。あとは「上げて」と頼み「よつと」起きあがると機内が少し揺れた。これだけの重量乗つけてるもんね。

ふう。ひといき入れて、

「じゃ、そろそろ」

言ったところで、

「通信です」

「どこから？」

「柳都の、千子夕七様です」

ああ。ユナチャン。最後に顔見たのいつだったっけ？

「暗号化は？」

「我々と同じ」

「私が作ったやつね。ならよし。十五分は解読されない。つないでちょうだい」

バイザーウインドウに見知った顔がポップアップする。

指では降下姿勢への移動を指示しながら、

「やつほー。夕七。元気？」

「それはこっちのセリフ。いまどこ？」

「太平洋」

「……ものすごいプロペラ音するんだけど」

ああ、ノイズキャンセリングしてなかったわ。

「これでどう？」

「問題はそっちじゃなくて。なんで数日実家の手伝いに行
くって出て行った貴女が十日以上も音沙汰なしで今そこ
にいるかってこと」

「なるほど」

なるほど。

左右を向けば同じような顔で「なるほど」と頷かれた。
なるほど。

要約すると、寂しかったから秘匿回線でお電話してきち
やったのね。うんうん。かわいいかわいい。

「帰ったらドラグヴァンデイル抱きしめてキスしてすぐ
にメンテするわ」

「何をどう解釈したらそういう返事になるの」

照れちゃってー。左右と微笑ましく目配せする。ね？

「よくわからないけど、その頭の後ろに見えてる黒いの、
何？ 担いでるの？」

お、いい目をしてる。さすがは我らが隊長様。

「羽」

この一言だけで大体伝わるから、我々の絆も相当に深い。
うむ。タ七は頭を抱えている。

「……それで、いつ帰ってこれるそう？」

「この戦いが終わったら。かな？」

開いた機体の底に腰掛け、雲のちょうどいい切れ間を探
す。ある程度はあつてほしい。

「戦いつて、その羽で飛んで帰ってくるつもり？」

惜しい。この羽、みんなは羽って呼んでるけど、実運用
上では放熱フィンで。揚力で滑空はできてもお空を自由に
は飛べないの。タ七もどうやらフライングテストか何かと
思ってる様子だった。あ、ここ。いろいろちよいどいい。
百聞は一見にしかずってね。ピ。

「……え？ なに？ ……ん？ ……あれって……ヒュ
ージ？」

共有設定した視覚映像を拡大せずにわざわざ目をこら
すタ七をかわいいなあと思いつつ、

「作戦開始、よろ」

「了解。オペレーション ARMER-II ファイナルフェーズ
『お嬢様降下作戦』を開始します」

「え？ ちよつといま、なんて」

「テイクオフ」

自分で言っただけから落ちた。

「降下！？！？！？」

夕七がわめいた。

概算だけで、実際どうなるかとかあんまり目途ってなかったけれど、意外とフルアーマーとオートガードで余裕があった。その余裕を抱えるような体勢をとれば、ああ、たしかにこうなるわ。この惑星抱きしめるポーズ。変なところで合点がいく。画面の向こうではテンパってる夕七が見えたのでミュートして、搭乗していた機体につないだ。

「こっち結構余裕あるわ。予想通り若干流されてるから羽、行くわね。あ。あと、周辺警戒は怠らぬよう」

『いずれも了解。流体再履修してみるものですね』

ね。雲の上なんてロールピッチヨーに三百六十度開けた場所だったらなおさら。下手にソナー系使うより目視も可能な画像処理系がダンゼンいい。普段行かないから気づかないけど。ん？ 夕七、何か言いたいこと？ ちょっと待

って。

背中の黒翼を展開させる。軽く制動を感じつつ、オートガードで軋みはない。うまく羽としても動作可能だ。オーケー。で、お次は。

「夕七？ もう落ち着いた？」

「なにしてんの！？」

繰り返して言っただけらしいセリフが若干食い気味に入ってくる。

「何って」

指で示す。

これで、あれを、

「殲滅しようかなって」

「百体以上いるじゃない！」

盛りすぎ盛りすぎ。ステルス入れてもせいぜい八十。

「ラージ含めて八十の群の中に普通は突っ込まないですよ！」

そうね。普通なら。

見下ろせば、向こうもこちらに気づいた様子。溜めといってもなんだし、ここらで一発かまそうかしら。

利き手を伸ばせば、サブアームがメインウェポンを手渡してくれる。貫通重視のセミオートの小型マシンガン。バ

ックバックにパイプで直結してる。とはいえ、これはあくまでちよい足し程度。構えるのと同時に、腰部左右のサイドアーマーマギカノンが展開。バックパックから回ってきた高法出力砲二門と一緒に目標を捕捉する。

「シューティングモード。フルバースト行ってみるわ」
胸の高鳴りが熱い。

トリガーを引いた。

画面の向こうではタ七がまたわめきだしていたのでミュートしておいて正解だった。

ブリューナクをスポイルして作った三つ折りサイドアーマーは甲型器作ったときの技術応用。もともと二つ折りに納めるつもりだったけど、三つ折りでもいけたのでほぼほぼ剛性の高いブリューナクを両サイドに付けてるに等しい。高出力砲はグラムのをそのまま乗っけている。なので、まあ、

「誘爆込みで半数撃破」

想定以上の火力だわ。画面の向こうにあんぐり口を開いたタ七が見えたので何かの素材の使えるかもしれないしスクショしておく。

ただまあ、ラージが一体残った。爆風でまた制動かかったとはいえ、残り余りある位置エネルギーもつたいないので、利き手フリップで展開していた砲門を閉じる。同時に鳳凰の尾のようにたなびいていた鎖状パーツがメインウエポンのマズル上部に重なりあつて収納される。それが砲門を冷やすと共に砲芯上には身の丈ほどのマギの刃がズバシュッと展開。羽は閉じ自由落下に身を任せる。それでも加速ちよつと足りない気がしたのでバックパック吹かせる。その勢いで両断した。

「これがブレードモードその壱」

刃を格納、鎖状パーツを再び延ばす。十分熱を持ったそれを振り回すこれが、その式。

腰部を一周するようフラフープ状に取り付けたレール上、サイドアーマーを走らせ、熱線攻撃をガード。

水面が近づくにつれ、羽を展開。落下から前進の揚力に換え敵の群に突っ込む。ついでにひと吹かし入れる。加速。突入口はマシンガンで開き、フリップ。鎖状パーツが連なり実剣となる。これがその参。

実は刀身的にはこっちの方が長い。出鱈目に振っても当たるし、フリップ動作で剣鎖自在。

振り回してるとすぐ群を抜けて先頭に踊り出た。これならと、サイドアーマーを展開。真正面から来るのはマシンガンで。ぼろぼろになつて扇を3つの角から削りにかかる。

「どう、タ七？ この子、最高にクールじゃない？」

あんぐりしていたタ七に声をかけたら第一声は、

「ナニソレ！？」

「乙型器」

「だから、ナニソレ！？」

「だから、天津重工先進技術実証機零式乙型器。略して天津乙」

世を忍ぶ飯の名は、ARMER-II。

「Zでしょ！」

看破が早い。さすがタ七。というか、前に似たようなこ

とをやったことある気もする。永久機関試したときだった？

実はこの機体、機体っていうか、バトルクロスの上に既存のパーツスポイルして乗っけに乗っけまくっただけだったりする。

なので一番のポイントはこのゴツい胸部装甲の下。バッテリーパックとしっかり接合されているのは、言ってしまうばマギタンクもしくはマギエンジン。発想は完全にヴァルキユリアスカートからの転用だけど。要はマギクリスタルコアの手前にタンク的なサブエンジンを置いて、そこに自身のマギを少し流し込む。一旦排出し空にした後、Zでタンクを空じゃない状態に戻す。排出した分をタンクに戻せば単純にマギ倍増。これを繰り返して循環させて膨大な量のマギを生成してる。ちなみにマギの貯蔵領域にはノインヴェルト弾から取り出してきたヒュージのコアのいいところを使ってるので、一回の充電でリリイ30人分くらいの貯蔵が可能。

「Zの使いすぎは問題じゃなかったの？」

「自分の中のマギが枯れてきたらサブエンジンからの逆流で回復。原理的にはすごく簡単」

「原理的には？」

「原理的には」

「実際は？」

「マギのID書き換えとかで演算コスト、マジでかかる」
素数探索並みにかかる。

ただOSはあくまでも第二世代機のままにしておきたいから独立機でないと意味がないし。しょうがなく背中に重たいGPUサーバ担いで飛んでるので。つまり、これ、
「地上だとともに立てない」

「……でしようね」

だから、上空からの一撃離脱の滑空機にした。ただしそれだといずれ地に落ちる。そこでさっき言ったヴァルスカ応用。負のマギは基本すべてサブエンジンが吸収し、ある程度溜まってきたときにバックパックから排出する。熱力知識をマギに置き換えたまさしくエンジン。

「なのでこういう使い方もできる」

軽く吹かせて宙返りで群の上を取る。ラージ倒したし、もはや怖いものはなし。一気に排気全排出。真下にいたのが消し飛んで、機体は雲を突き抜けた。

再び反転。自由落下で冷却やら回復やらしつつ、追いかけてきたのには、めがけてフルバースト。外れたやつらもウィップと掃射でまとめて始末して、再び海上に舞い戻る。

「……無茶苦茶」

「好いでしよう？」

「付け焼き刃にもほどがある」

それ採用！ 付け焼き刃！ この機体、いまからそう呼ぶ。ああ、付け焼き刃ちゃん、最高にクールで最高に可変しまくりで最高に好き。

「Z専用機どころか、それも完全に麻嶺が変形のパーツだよ……」

夕七、貴方ってばなんていつも最高の発想をくれるんだろう。専用機とは思ってたけど、その意識はまるでなかったわ！ いま私、変形機構のパーツになってる！ ヤバい！ それはマジで最高すぎんだけど。語彙力なくなるわ。

『お嬢様。ご歓談中、失礼します』

「ん？ なに？」

『例の遅れていたデザインが』

「届いたの！」

肯定に握り拳を作る。うちだとしても意匠は和寄りになりがちだから特別に外注に出していた。遅れても別に駆動に問題ないし。

「それ帰ったら、私に貼って！」

もともと、サブエンジン用のハザードマークだったけれ

ど。もはや私自身がハザードばいから！

「帰ったら、またバナナで乾杯するわよ！」

「……ナニソレ」

知らないの？

「バナナは手が汚れてても食べられる最強の栄養フルーツなのよ」

「もしかしくなくても、そればかり食べてたわよね？ その顔」

夕七に言われなくても、その通り。だって、ちぎって皮むいて食べるだけ。下手な固形食よりダンゼンおいしい。味なんて置いとくだけで変わる変わる。あと、手が汚れてもOK！

「……よくない」

「えゝ」

まあ、趣味趣向はひとそれぞれだし。

思いつつ、楽しい夕七との通信もここらで一旦終了の時間です。じゃあね。と切って回線を管制機に戻す。

「もう捉えてるでしょ？」

『はい。不審な鑑影を一隻』

「どうもきな臭い」とこと通信しようとしてるみたい」

最初に羽を開いた時点で上空からこの海域一帯に通信

妨害をばらまいてある。うちの回線だけは巧みにくぐり抜けられるよう振動数調整済み。逆を言うと、ほかの信号は全部弾くから、この付け焼き刃（命名、夕七）の情報は人間どころかヒュージネストにすら戻っていないはず。そしていま話題のお船の信号はそこに引つかかってきた。あー。うん。これくらいの外付け機能は許してほしい。飛んでるとやっぱバイザーだけじゃ補いきれない情報あるし。さてどうしょ。私が追ってもいいけれど。

『こちらで対処します』

「悪いわね」

『いえ。子供の手を汚させないのが大人の仕事です』

オトナ、ありがたいわ。私もいずれなるかと思うとめんどくさそうだけど。

『お嬢様は、ずっとお嬢様のままでいてください』

そう言ってくれることが、実にありがたい。ひとまず指ハートで返したら、ショートカット登録してあったの忘れてて自動ロックオンした高出力砲が背後めがけてぶっ放された。

結論から言うと。

サブエンジンは戦闘後にうんともすんとも言わなくなった。たぶんだけど、途中で演算容量が溢れてID付け換えに失敗、オリジナルのマジが増幅されたのが原因。

オーバーヒートしたエンジンは止め、脚部のジェット推進でゆつくりと制動をかけながら着水する。ハイヒールと呼んでいる大型脚部には、もしもの時の戦線離脱を目的に通常燃料のジェットエンジンも載せていた。

これも使う機会なかったわ。と思い、ハイヒール底部からブレードを展開。残った推進を海面を滑るスケートのように大きく弧を描きながら減らしていき、やがて完全に停止した。

背中から海面に倒れ込む。

ふう。

胴体手足のロックを外し、バイザーを取ると、三つ編みに編んだ銀髪が汗と一緒に太陽光に照らされる。

あつ。

空の上は結構に結構寒かったけど、やっぱりしたに降りると暑い。太平洋だもの。浮かんだ機体の周囲には機体の

熱で蒸発した海水が立ち上っているのでこれも原因かもしれない。

とりあえずパーカーを脱いで腰に巻く。履いていたガーデン指定のジャージも脱いだ。それでもって、最後の一体かな？ 親の顔より見たミドル級。ずっと背負っていた甲型器ちゃんで撃ち抜いた。

こういうとき、とりまわしやすいのは便利よね。

でもって。こつちの子はまだまだ全然改良の余地があり。

そもさっきみたいに昨今の戦場でワンマンアーミー気取るのは実際にだいぶ無理がある。ノインヴェルトの演算すら積めてないし。チャフとかその代用にすぎない。

今回の目的が、もともと変形機構積み積みにしたかったっていうのもあるけど。第二世代機の頂点とか謳いつつ、それは建前で。ほんととは全身で変形を堪能したかったから、パイプで全部がっちゃんこ。やりたいことは大体叶った。いやでも、やってみないと知らないことっていっぱいあるんだというのも知れてよかったわよ？ たとえば、そう。あの雲を突き破って見上げた空の青さとか。

父が何かあるたびに天を仰ぐのもわからないでもないと思った。

*
*
*